

日曜日の午後。駅前の喧騒を避けるように入り込んだ路地裏のカフェは、窓から差し込む西日がオレンジ色に淀んで、どこか現実味を欠いていた。

僕はカフェの窓際の席で、推しのアイドルのインタビューが載った雑誌をめくりながら、カフェラテを一口飲んだ。

（はぁ……。どこにでもありそうな黒いスーツなのに、カナトさまが着るとどうしてこんなにカッコいいんだろう……）

やっときた休日は、僕にとって唯一、自分を許せる時間だ。

Ωとして生まれ、その上『カントボーイ』という、男としてもΩとしても中途半端で、どこか出来損ないのような歪な身体。それを隠して、誰にも気づかれないように、空気のように日々を生きている。

そんな僕にとって、画面の向こう側にいる推しである『カナトさま』は、決して届かない、光そのものの存在だった。

(帰ってカナトさまのDVD見返そう)

そう思って席を立った、その時だった。テーブルの上で、スマートフォンが耳を突き破るような不快な警告音を鳴らし、激しく震えた。

「っ……！？ なに、これ……」

静かだった店内の視線が一斉に僕に突き刺さる。憐れみ、好奇、そして「Ωだ」と断定するような冷ややかな目。僕は逃げ場を失い、震える手で端末を手を取った。画面には赤い文字で通知が表示されていた。

## 【疑似番命令】

指先から温度が消えていくのが分かった。ドクドクと、耳元で自分の心臓がうるさすぎる。

(嘘だ……。僕みたいな、こんな、男としても欠陥

品みたいなΩが、なんで……)

少子化対策として施行された『強制バース法』。遺伝子レベルでの適合性が判断され、選ばれた未婚、もしくは番のいないペアには「番としての性的行為義務」が発生する。そうして選ばれたペアは指定された時間内に性交をしなくてはならない。

(どうしよう……ペアの人と会わなきゃ……)

でも。僕のような体質の人間が選ばれるなんて。そんなの、相手の人に申し訳ない。

いたたまれなくなっって店を出て専用アプリを開くと、すでに相手からのメッセージが届いていた。

『……通知、見ましたか？ 今後のこと、話したいです』

短文で、淡々とした文章だった。慌てて返信をする。

『あ、はい……見ました。すみません』

『え？ どうして謝るんです？ それと期限ですが、一週間の中で会える日はありますか？』

『ええと、基本的には、平日は仕事なので、それ以降なら……』

『それなら今日、この後は大丈夫ですか？』

「え……っ、今日……？」

思わず声が漏れた。心の準備なんて、一秒もできていない。

『もちろん、無理なら強制はしません。でも、早い方がお互いに気が楽だと思って。どうしますか？』

『大丈夫です！』

相手を待たせてはいけない。しかも向こうは $\alpha$ だ。僕は反射的に同意してしまった。

『ありがとうございます。人目があるので、場所はこっちで指定させていただきます。URLを送ります』

送られてきたのは、僕のような人間は一生縁がないような、都内屈指の超高級ホテルの住所だった。

(……こんなところ、僕の給料じゃ一生泊まれない……。どんな、怖い人が待ってるんだろう……)

平凡な。平凡以下の僕なんかが関われるはずのない、雲の上の存在である $\alpha$ 。そんな一人とこれから会って、疑似番になるなんて。

「あ。それより、早いうちに話しておかなきゃ……」

『あの、すみません。実は僕は普通の $\Omega$ とはちょっと違うところがあって……』

『違うところ？ もしかして、今日会うのは難しかったりする？』

『あ、いえ、そういうことじゃないんですが……』

僕はふっと息を吐いて、画面に文字を打ち込んだ。

『あの、実は僕はカントボーイなんです』

数秒の間が空いて、返信が届いた。

『Ωであって、カントボーイってことですか？』

『そうです』

『そうなんです。外見からすぐにわかる感じですか？ 人目がキツイなら迎えに行きますよ』

『大丈夫です。こっちで向かいます』

『難しいことは遠慮なく言ってください』

（すごい、優しい人だな……）

まだ会ったことはないけれど、メッセージのやりとりを通してなんとなく好感を持った。

『フロントで「樫本」の連れだと言え、部屋に入れるようにしてあります。待っています』

（カナトさまの本名と同じ苗字だ……）

それだけで、ほんの少しだけ、怖さが和らいだ気

がした。

「樫本さん……」

名前をなぞるように呟いて、僕はタクシーに飛び乗った。

そして到着したホテルのフロントで部屋を聞けば、スイートルームだった。スイートルームなんて初めてだ。僕は恐る恐るエレベーターに乗って、指定された部屋の前に立った。そしてカードキーをかざすと、乾いた音と共に重厚な扉が開いた。

「……あ、あの……失礼、します……」

部屋の中は、夜景の光だけで満たされていた。広いリビングのソファに、一人の男性が座っている。逆光で顔は見えない。けれど、そのシルエットだけで、彼が並外れた $\alpha$ であることを本能が察知して、背筋が震えた。

「……よかった。無事に来れたみたいで」

その声を聞いた瞬間、全身の血が逆流した。聞き覚えがある。いや、聞き間違えるはずがない。毎日、イヤホン越しに僕の心を救ってくれていた、あの低くて落ち着いた声。

彼がゆっくりと立ち上がり、僕の方へ歩いてくる。月の光に照らされたその顔を見て、僕は息をすることさえ忘れた。

「カ、カナトさま……？」

「……流石に知っているよね。けどカナトさまはちょっと。疑似とはいえ、番になるわけだし、カナトでいいって」

「そ、それは……」

「いいって。それより名前を聞いてもいい？」

「あ、真広です。真ん中の字に、広いで……」

「真広。よろしく」

「は、はい……」



同じ男とは思えないくらい、整った顔立ち。けれど今、画面越しで見るその瞳は、真っ直ぐに僕を見つめている。

「うそ……」

（カナトさまが疑似番の相手……？ あの、カナトさまが……？）

「嘘、じゃないよ。俺はまだ番相手もないし、結婚もしていないから。だからこうして選ばれたんだ」

淡々とした言葉が返ってくる。それはそうだ。ファンクラブでも「番がいる」「恋人がいる」ましてや「結婚している」なんてことは聞いたことがない。だから『強制バース法』で選ばれた。

どこか冷静な頭ではそう思うものの、実際には僕は動揺で動けなかった。

その時、二台のスマートフォンが、再び独特な音を立てた。

【パートナーの対面を確認。強制発情システムを開

始します】

「あ……っ、あ……！？♡」

画面の文字を見た瞬間、身体の奥から熱が溢れ出した。熱は内側からこじ開けられるようにして、強制的に引き出されていく。

「はっ♡、あ、はあ……っ♡ な、に……これ……っ♡」（推しの前なのに……っ！）

膝の力がふっと抜け、僕はその場に崩れ落ちそうになった。下腹部が熱い。触れられてもいけないのに、僕の身体は勝手に、目の前のαを求めて蜜を滴らせ始めてしまう。

（……ヒートでも、ないのにっ♡ 身体が、勝手に……っ！ こんな……っ♡）

太ももの内側が、自分でも引くくらいの熱を持っ

て、じわじわと湿り気を帯びていく。『強制発情』のシステムは、どこまでも無慈悲だ。僕的意思なんてお構いなしに、目の前の $\alpha$ を受け入れるための状態へと作り替えていく。

「……知識では知っていたけど。……本当に、理性が焼かれるな、これ」

叶翔さんの、いつもの爽やかな顔が、今は微かに熱を帯びている。テレビで見せる笑顔は剥がれ、呼吸は低く重い。その瞳には、今まで見たこともないような、静かで、けれど逃げ場を奪うような $\alpha$ の本能が宿っていた。

「……っ、はぁ。……想像以上。……身体が、ずっと熱い」

叶翔さんが、音もなく僕との距離を詰めてくる。

(ち、近い……っ！♡)

至近距離で浴びる、彼の熱い吐息。鼻腔をくすぐる、気品のある香水と、隠しきれない生々しいαの匂い。それだけで、僕の身体はさらに一段階、奥の方から疼きだした。

「あ、あっ……♡」

スイートルームの広いソファに沈み込む僕の身体に、彼の長い影が重なる。

「あっ♡」

「……真広も、俺と同じくらい熱い？♡……そんなに潤んだ目で見つめられたら……俺だって、とめられなくなる♡」

叶翔さんが、僕の崩れ落ちそうな肩を、大きな手でそっと支えた。指先が触れるたびに、身体がびくんっと跳ね、喉からは抑えきれない甘い声が漏れ出した。